

初釜茶会亭主体験記

正月の「初釜茶会」で、初めて茶席の亭主を務めました。

そもそもなぜ茶道の稽古を始めたのか、今となっては明確な理由もわからなくなってしまいましたが、おそらく父が趣味で集めていた茶碗や茶入れなどの茶道具の姿に惹かれていたことが、影響しているのだと思います。

一年ほど「体験入門」してすぐに足を洗おうと、不謹慎な気持ちで教室の門を叩いたところ、師匠から熱心にご指導いただいたおかげで茶道の奥深さに触れることができ、今日まで稽古を続けることができます。

昨年たまたま「年男」ということもあり、大濠公園の日本庭園で開催された秋季茶会のお点前を務めさせていただき、「それでは、ついでに」という勢いで、初釜茶会の亭主の大役を仰せつかることになりました。茶歴の浅い私が、お引き受けするのは恐縮でしたが、還暦を過ぎた男がしり込みするのもみっともない話だと思い、覚悟を決めた次第です。

■ 茶会にのぞむ

初釜茶会の当日は、朝早く師匠のお宅に伺って茶道具を車に積み込み、ホテル・オークラ「山里」の茶室に向かいました。大切なお道具に傷をつけないように荷をほどき、茶室にしつらえてお客様を待ちます。ここまでで、すでに2時間が経過しています。

出席者がそろい茶室入りを済ませて、新年のあいさつを述べたあと、茶壺の口封を切って茶葉を取り出す「口切の茶事」に取り掛かります。

そのあと懐石料理、お酒をお出しし、亭主が作法にどおりにお酌をして回る、と文字にすると簡単なのですが、相当の神経を使い、感覚を研ぎ澄ませて茶会にのぞんでいるのです。

膳の上げ下げ、椀物、鉢物の運び出しなど水屋仕事は戦場のような忙しさです。しかもこれを殆ど無言で行わなければならなりません。茶席での会話の進み具合や、箸を落とす音（食事のお仕舞の合図）などを聞き漏らさないようにするためです。

茶事の手順や時間配分など、すべて心得ていなければならないので、「茶事は水屋仕事ができる一人前」と言われるのもよく分かります。茶席では和やかで楽しい時間が過ぎていて、これと並行するように茶事の成功を祈りながら黙々と仕事をする裏方仕事の時間が流れていきます。

食事が終わるとお客様は待合に移動し、お茶を供するまでの休憩の時間（中立）に入ります。その間亭主は茶室を整え直し、ドラを鳴らしてお客様を茶室にお迎えします。

いよいよ本番に向けて特訓した「濃茶」の点前を皆様に披露し、お茶を差上げてお茶会のクライマックスを迎えます。

お客様の退出時には亭主が送り礼で見送るのですが、このときに絶対の無言が約束で、「一期一会」の有り難さを、主客互いに無言の礼で噛みしめるのです。



あとから振り返ってみて、点前の手順を間違えないように、粗相のないようにと汲々とするばかりの頼りない亭主でありました。師匠からお預かりした茶室の掛軸が「紅炉一点雪」で、このテーマを茶会に反映させるべく、様々な道具の取り合わせを考えるのが亭主の器量なのですが、そこまでの余裕がありません。

真っ赤に熱を発する炉のうえに、ひとひらの雪が舞い降りて、それがたちまち消え去る様が「紅炉一点雪」の風景なので、炉の赤と雪の白を対比させるように、床の間の花を「紅白の椿」のシンプルなものに師匠が活かしてくださって、なるほどと思った次第です。

■ 見たてる力

能楽師の安田登さんが著書『あわいの力』（ミシマ社）のなかに、日本の文化には「見たてる」という力があり、それは絶えざる訓練によって醸成されるものなのだ、ということを書いておられます。

目に見えないものを「あるがごとく感じる」のは意思の力でもできます。これを「信じる」と言うのだとすると、「見たて」は、現に目の前にあるかのように「見えてしまう」ことを言います。これは意思の力ではなく訓練によって身につけるしかないものなのです。

たとえば、東京本駒込の六義園には和歌などの古典を連想させる文字の刻まれた石柱が随所に置かれています。ここを訪れる武士はこのような仕掛けによって、夕暮れの若の浦や、鶴の羽ばたく様子を眼前に再現させる訓練をしていたというのです。

安田さんは、幕末に欧米列強の侵略を阻止しえた陰には、列強どうしを牽制させあうほどの老獪な幕閣の知恵があったと言います。そこに「見たてる」力があつたのだ、という指摘もあつて、読みながら思わず唖ってしまいました。

床の間の花や茶道具の取り合わせに、亭主の見ている景色をくみ取り、その思いのさらに深い心境を引き出して、同席した相客もしみじみと味わう。それがすぐれた茶会の醍醐味なのだと思います。省みて亭主の力量不足をつくづくと感じた次第です。

2020年には次世代通信システム「5G」の商業利用が本格化されると言われています。大容量、超高速のデータ通信で、自動車の自動運転や遠隔治療の実現に大きく寄与し、別々の場所にいる人たちが違和感なく会議を開くことも、同時にエンターテインメントを楽しむことも可能になるのだそうです。

いまここに無いものが、現実に見えてしまう時代が到来するのでしょうか、それは同時に「見たてる」力やそれを醸成する訓練の文化を駆逐してしまうのではないか。ひいては文化の奥行きといったものを減じてしまうのではないか。未熟な茶人の杞憂であれば良いのですが、そんなことを考えます。

(所長 瀬戸 英晴)

税理士 福岡中央会計

〒810
-0001

福岡市中央区天神5-7-3福岡天神北ビル3F

Tel. 092-715-5551
Fax. 092-721-5992
<http://www.fc-tax.com>